

# 中級日本語学習者を対象とした作文授業

## —「文章表現C」授業報告—

A Class Report of “Composition C” for Intermediate Japanese Learners

秋 山 容 子

### 要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける中級学習者を対象とした作文授業「文章表現C」についての報告である。2017年前期・後期に行った授業について、内容や指導方法を報告し、作文授業のあり方を考える。

### 1. はじめに

岐阜大学留学生センター日本語コースには、集中的に日本語が学習できる「集中コース」と専門の研究をしながら日本語が学べる「一般コース」の2コースがあるが、「文章表現C」は、集中コースの受講者のみが受講できる。「文章表現C」は中級レベルの受講者を対象としたクラスである。

2017年度前期に初めて「文章表現C」を担当することになったが、岐阜大学で教鞭を取って間もないこともあり、クラスのレベル、受講者の能力、コースの目的、授業の進め方等、把握できていないことが多かった。そのため、Cクラス全体を把握する必要がある。前担当者の授業記録は「文章表現C」だけでなくその他のCクラスの授業記録も読むなどしてCクラス全体を把握することから始めた。コースの最終目標を「論理的に説明文・意見文が書けるようになること」として授業計画を立てた。

2017年度前期・後期に行った「文章表現C」の授業について授業内容、工夫した点、問題点などを報告し、中級レベルの作文授業とはどのようなものであるかを考えたい。

### 2. 授業計画

#### 2.1 使用教材の選定

前担当者の授業記録を基に、『小論文への12のステップ』（スリーエーネットワーク）、『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』（アルク）、『大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』（アルク）、『作文授業の作り方』（アルク）を参考として、ハンドアウトと練習問題を作成して授業を進めることにした。その他に、「ドラマの内容を説明する」という説明文の練習では、YouTubeから映像を取り入れ、授業で使用した。2017年度前期・後期ともに使用教材は同じものを使用した。後期は、ハンドアウトと練習問題を適宜直して使用した。

## 2.2 授業の流れ

2017年度前期・後期ともに行った主な授業の流れを以下表1.に記す。

表1. 授業の流れ

	授業内	授業外
1) 書く準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・復習（前回の内容）</li> <li>・練習問題 （文体、接続詞、段落、中心文・支持文、話しことばから書きことばへ、説明文、意見文）</li> <li>・動機づけ</li> <li>・構成を考える</li> <li>・短文作成練習</li> </ul>	
2) 書く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・下書き作成（時間内に書けなかった場合は宿題）</li> <li>・受講者の振り返り</li> <li>・下書きのフィードバック （①対講師 ②ペアで読み合い）</li> <li>・清書作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・下書き作成（宿題）</li> <li>・講師による添削</li> <li>・添削後の直し</li> </ul>
3) 書いた後で	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読み練習</li> <li>・発表</li> <li>・クラス間で評価する</li> </ul>	

### 1) 書く準備

中級クラスは、表現方法が複雑になるので、初めて学ぶ表現方法、例えば「である体の書き方」、「書きことばの接続詞」を扱った際は、導入後練習問題を解いて十分に練習する時間を作った。その後、動機づけの時間ではブレインストーミングを行い、作文のテーマについてクラスで話し合ったり、構成をクラス全体で考えたりして、何を書くかを意識させた。

### 2) 書く

下書きの段階では、時々フローチャートを用いて段落構成を意識させた。慣れてきたころには、受講者自らメモ用紙に構成をメモするようになった。フィードバックの内容については、3.3節の授業内の活動で詳述する。

### 3) 書いた後で

読み練習→発表→クラス間の評価の順に進めた。以下に詳細を述べる。

- ・読み練習：自分が書いた作文が上手に読めるように各自で練習。講師は机間巡視し発音を指導。
- ・発表：ペアまたはグループになり、作文を読み合う。代表者が全体の前で発表。
- ・クラス間の評価：発表後、まず発表者が感想を言い、その後クラスメイトからフィードバックをもらう。クラスメイトは、フィードバック用紙に「質問」「感想」を記入し、発表後に口頭でフィードバックをする。

### 3. 2017年度前期

#### 3.1 受講者の特徴について

2017年度前期の受講者は全4名（漢字圏3名、非漢字圏1名）であった。4名中1名が非漢字圏の受講者であったため、文法力と漢字力のレベル差が心配された。12週目から1名が自己都合で来なくなったので、受講者は3名（漢字圏2名、非漢字圏1名）となった。

#### 3.2 授業内容

2017年度前期授業内容について、以下表2.に記す。

表2. 2017年度前期授業内容

回	内容	目標
1	1) 授業に関するオリエンテーション 2) 表記の仕方 3) 作文①「自己紹介文」 4) 宿題：作文①「自己紹介文」下書き	・構成を考える ・句読点の使い方を覚える
2	1) 表記（記号）について 2) 原稿用紙の使い方 3) 作文①「自己紹介文」のフィードバック 4) 宿題：作文①「自己紹介文」清書	・原稿用紙の使い方を学ぶ
3	1) 文体について 2) 連用中止形について 3) 作文②「自分の国の習慣・マナーについて」 4) 作文①のフィードバックの続き 5) 宿題：作文②下書き	・文体、連用中止形を覚える ・構成を考える
4	1) 文体について復習、練習問題 2) 話しことばから書きことばへ 3) 叙述文（直接話法、間接話法） 4) 作文②のフィードバック 5) 宿題：作文②清書	・話しことばと書きことばの違いを明確にする ・叙述文の書き方を覚える
5	1) 叙述文復習 2) 段落と中心文・支持文 3) 作文②清書の振り返り 4) 作文③「インターネットの問題点について」作成 5) 宿題：作文③下書き	・段落に分けて書く ・中心文、支持文の書き方
6	1) 作文③クラス内で読み合い 2) 接続詞の使い方（順接・逆接の接続詞） 3) 宿題：作文③清書	・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ
7	1) 順接・逆接の接続詞の復習 2) その他接続詞について	・接続詞について学ぶ

	3) 接続詞を使って文作 4) 作文③清書のフィードバック 5) 宿題：接続詞を使った短文作成	
8	1) 宿題「接続詞を使った短文作成」ペアで読み合い、全体シェア 2) 説明文について導入、練習問題 3) 説明文作文④「教室について」作成 4) 宿題：作文④「教室について」／作文⑤「自分の部屋について」	・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ ・説明文を書く① (場所を説明する)
9	1) 作文④発表、クラス内フィードバック 2) 作文⑤発表、クラス内フィードバック 3) 「ドラマの内容について」説明文の書き方	・説明文を書く② (場所を説明する)
10	1) 作文⑥「ドラマの内容について」説明文の書き方続き 2) ドラマの映像を見る、作文⑥を書く、発表、フィードバック	・説明文を書く (物語の内容を説明する)
11	1) 意見文とは(事実文と意見文) 2) 作文⑦「レジ袋をもらわないほうがいい」 意見文の書き方導入後、各自意見文を書く 3) 宿題：作文⑦意見文「レジ袋を使わないほうがいい」	・意見文を書く (決められた意見を書く)
12	1) 作文⑦のフィードバック、清書して提出 2) 作文⑧意見文「愛と結婚について」 3) 宿題：作文⑧作成	・意見文 (自分の意見を書く)
13	1) 作文⑧フィードバック 2) ペアで意見文の発表、クラス全体でシェア	・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ
14	1) 最終試験(①問題編 ②作文編) 2) コースの振り返り	

初回の授業で「自己紹介文」を作成し、受講者の作文能力を測った。主な特徴は、「中級文型の文法的な間違い」「表記ミスが多い」「中級文型にとらわれ初級文型を忘れていた」というものだった。受講者たちは日本語で作文を書いたことはあるが、原稿用紙を使って書いたことがなかった。そこで、原稿用紙の使い方から説明をした。受講者の母国では、段落の書き始めは「2マス」空けることや、母国ではマス目に文字を書く習慣がないということもあり、原稿用紙の使い方は受講者にとっては新鮮なことのようだった。原稿用紙の使い方は紹介程度にとどめ、作文は主に罫線用紙を使用した。

受講者から、基礎からしっかり学びたいとの要望があったため、まずは基礎を固め、じっくり進めていくことにした。授業の流れの中では、特にフィードバックに時間をかけた。フィードバックで工夫した点を以下に記す。

### 3.3 授業内の活動

中級レベルになると、よく耳にする「話しことば」にも慣れてきたころである。作文では、「である体」で書くように指示をしたが、「話しことば」を使ったり、また丁寧な書き方として「です・ます体」で書いてしまったりという文体の混同がよく見られた。これらの誤用は自分で気づきやすいため、添削段階では下線を引く程度にとどめ、自らが誤用に気づくように添削をして返却し

た。

フィードバックの時間を受講者との「コミュニケーションの場」と位置付けた。作文を読んだだけでは、受講者の意図が汲み取れない場合があり、受講者と対話することで受講者が書こうとしている内容を理解することができた。

フィードバックの際は、まず受講者に自身の作文を振り返ってもらった。振り返りができている受講者は、「構成を直したほうがいい」「内容が浅かった」などの振り返りがあった。反対に、振り返りがあまりできない受講者は文法のミスばかり指摘する傾向があった。例えば、助詞の「に」と「で」の違いが分からない、どうして助詞の「で」は使えないのかなど、作文の全体像を見て捉えることができていなかった。

フィードバックは対講師型だけではなく、受講者同士で作文を読み合う「ピア活動」も取り入れた。受講者数分の作文をコピーし、全員の作文がクラス間で読めるようにした。これにより、自分の作文に対するクラスメイトの反応を直接見ることができた。また、良かった点、改善点など厳しい意見をもらうこともできたので、ある程度の緊張感が生まれた。同じテーマであっても様々な意見があることや、クラスメイトがどのような作文を書いているのかを知る機会にもなったので、「いい刺激になった」という感想もあった。また、フィードバックは日本語で行うので、日本語でコミュニケーションを取る練習にもつながった。書いた作文は書きっぱなしにせず、振り返りまでを一区切りとした。振り返ることで、自分の作文を見つめ直し、次に書く作文はもっと相手に伝わりやすいように書こうというモチベーションにもつながった。

### 3.4 授業を振り返って

前期のクラスの受講者は学習意欲が非常に高かったため、初回の授業から最終授業までに上達が見られた。授業態度も真面目であり、メモをよく取っていた。復習もよくできていて、初めて学習した「連用中止形」「である体」は回を重ねるごとに慣れていった。最終目標を「論理的に説明文・意見文が書けること」としていたため、「作文の構成」も常に意識して書くように指導した。初級レベルの基本的な作文の書き方は理解していたため、比較的スムーズに授業が進んだ。3.1節でも述べたように、クラスで1名だけ非漢字圏の受講者がいたので、他の受講者とのレベル差が心配されたが、中級の表現力が乏しいだけで、理路整然と相手に伝わりやすい文章で書けるようになった。また、この受講者は一人だけ他の受講者と母語が異なったが、このことはプラスに働き、クラス内での日本語の発話の活性化につながった。特に、意見文「愛と結婚について」ではクラス内で白熱した意見交換が行われた。

コースの途中で、「接続詞」の使い方が分からないという意見があった。提出された作文を読んでいると、初級レベルの接続詞しか使えていないという印象があったので、受講者自らが苦手な点に気がついたことは良かったと思う。前向きに授業に取り組んでいた。

反省点としては、初級文型が定着していない受講者へのフォローがあげられる。「書く準備」の段階で、短文を書いて文法の定着確認を行い、その後に課題作成に取り組むというステップをもっと増やしてもよかったと思う。

#### 4. 2017年度後期

##### 4.1 受講者の特徴について

2017年度後期の受講者は全6名で、6名全員が漢字圏の受講者であった。N1合格者が2名いたこともあり、受講者のレベルも高いと予想された。

##### 4.2 授業内容

2017年度後期授業内容について、以下表3.に記す。

表3. 2017年度後期授業内容

回	内容	目標
1	1) 授業に関するオリエンテーション 2) 表記の仕方／原稿用紙の使い方 3) 作文①「自己紹介文」 4) 宿題：作文①「自己紹介文」	・構成を考える ・原稿用紙の使い方に慣れる
2	1) 作文①「自己紹介文」のフィードバック 2) 作文の読み練習、ペアでフィードバック、発表 3) 作文②「わたしの好きな歌」～『中級を学ぼう』第1課作文より 4) 宿題：作文②作成	・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ ・作文を正確に読む
3	1) 文体について 2) 連用中止形について 3) 話しことばから書きことばへ（副詞） 4) 作文②フィードバック 5) 作文③「自分の国と日本との習慣・マナーの違い」 6) 宿題：作文③作成	・文体、連用中止形を覚える ・話しことばと書きことばの違いを明確にする
4	1) 文体・連用中止形の復習、練習問題 2) 話しことばから書きことばへ（副詞以外） 3) 作文③のフィードバック 4) 宿題：作文③清書提出	・文体の見直し ・話しことばと書きことばの違いを明確にする
5	1) 作文③読み練習、発表 2) 文体について再々復習 3) 叙述文：直接話法から間接話法への変換	・書いた作文を正確に読む ・文体の定着 ・叙述文の書き方
6	1) 段落に分けて書く 2) 中心文と支持文について 3) 作文④意見文「インターネットについて」 4) 宿題：作文④提出	・段落に分けて書くことを学ぶ ・文章の構成を学ぶ ・意見文の書き方を学ぶ
7	1) 作文④の分析 2) 『中級を学ぼう』第3課作文「日本へ来て分かったこと」を分析 3) 作文⑤「勘違い／失敗について」：作文の構成分析	・構成の分析 ・構成を練る

	4) 宿題：作文⑤提出	
8	1) 接続詞について（順接・逆接の接続詞） 2) 接続詞を使って短文作成練習 3) 作文⑤のフィードバック	・作文の分析 ・「接続詞」の使い方を明確にする
9	1) 作文⑤発表 2) 説明文「具体的な表現」「曖昧な表現」 ・『中級を学ぶ』第5課の表現を復習 ・場所を説明する短作文作成 3) 作文⑥：説明文「自分の部屋を説明する」 4) 場所を説明する際の「具体的な表現」「曖昧な表現」を復習 5) 宿題：作文⑥作成	・「ピア活動」を通じ、自律的に学ぶ ・具体的な表現を使って説明文を書くことを学ぶ ・説明文を書く① (場所を説明する)
10	1) 復習：具体的な表現 2) 客観的に書く練習 3) 説明文のポイントを復習 4) 説明文練習「教室について説明する」、発表 5) 宿題：作文⑥再提出	・客観的に書くことを学ぶ ・説明文のポイントを確認 ・説明文を書く② (場所を説明する)
11	1) 説明文のポイントを再確認 2) 作文⑥フィードバック 3) 作文⑥発表 4) 宿題：アニメーション映画「君の名は。」を説明するために必要な情報を箇条書きにしてくる	・説明文のポイントを再確認する ・説明文を書く③ (物語の内容を説明する)
12	1) 宿題の確認 2) 「ドラマの内容について」説明文の書き方 3) ドラマの映像を見る、説明文を書く、発表、フィードバック	・映画やドラマの内容を説明するときのポイントを学ぶ
13	1) 意見文について：事実文と意見文との違い 2) 意見文の文体について 3) 意見文を書く「愛と結婚について」「子供が携帯電話を持つことについて」「バスや電車の優先席について」「救急車の有料化について」 4) 宿題⑦「意見文」提出	・意見文の書き方を学ぶ ・意見文を書く (自分の意見)
14	1) 最終試験（①問題編 ②作文編） 2) 作文⑦フィードバック 3) アンケート実施	

後期の受講者も原稿用紙を使って作文を書いた経験がなかったので、原稿用紙に作文を書く基礎的なことから授業を始めた。初回の授業では、口頭で簡単なアンケートを実施した。受講者全員が漢字圏の受講者であること、日本語で小論文を書いた経験があること、N1 取得者も 2 名いたことから、文章表現能力も高いであろうと予想した。だが、予想に反し、初回の作文では、「文体の混同」、「作文を全体で数行しか書けない」、「時制ミス」、「形容詞と動詞の混同」、「字が雑で読みにくい」など問題が多数見られた。作文に慣れていないということもあったが、受講者の様子を見ながら授業を進めていく必要性を感じた。

また、前期の授業の反省をふまえ、「書く準備」の段階で短文を作成して文型を確認し、その後、作文作成に取り組むというワンステップを前期より増やした。

### 4.3 授業内の活動

後期も前期同様、授業内の活動は大きく変えなかった。後期もフィードバックに重点を置いた。後期のクラスには次の3つの問題があった。

- 1) 受講者の母語が同じであることから起こる問題
- 2) 漢字圏の受講者であることから起こる問題
- 3) 同じ間違いを繰り返すという問題

これらの問題に対応した授業内の活動を以下に述べる。

1)については、授業中の質疑応答などの発話は問題ないのだが、ペアやグループ活動において、日本語で意見を言うことを躊躇する傾向があった。母語が同じ者同士が日本語で会話することが恥ずかしい様子だった。また、フィードバックを受講者の母語で行ったり、フィードバック用紙を相手に見せるだけで、日本語で発話しなかったりということがあった。そこで、前期に比べて受講者同士でのフィードバックの時間を減らし、対講師型のフィードバックの時間を増やした。受講者達は、母国では講師と1対1で作文のフィードバックを受けたことがなく、講師から直接フィードバックを受けることができるのはうれしかったと言っていた。コースの途中からはフィードバックを母語で行うことを許可した。母語話者が集まった特性を活かすためと、母語のほうがより正確に意見が伝わるのであれば、それはそれで良いと考えたからだ。ただし、フィードバック中の発話内容を日本語でフィードバック用紙に書くように指示し、後でフィードバックの内容を日本語でまとめて発表させた。

2)については、漢字に関しては「分かる、読める、書ける」という自信があるのか、発表の際、自分が書いた作文の漢字が読めないということが続いた。そこで、毎回発表の前に「読み練習」の時間を加えた。前期は「上手に読むため」という目的で読み練習の時間を取ったが、後期は「自分の作文の漢字が読めるように」という目的で読み練習の時間を取った。毎回作文の発表を行うので、作文を書いているときにルビを振るなど事前準備ができるようになることを期待したが、毎回、読み練習の際に慌てて漢字にルビを振っていた。習慣化できるような指示が足りなかったと反省している。

3)については、フィードバックをしても、課題が変わるとまた同じ間違いを繰り返すということが続いた。例えば、「文体の混同」「話しことばで書く」「説明文で客観的な表現を使う」など受講者それぞれが間違えるポイントが同じなのだが、回を重ねても同じ間違いが繰り返された。そこで、復習コマを増やして気づきを促した。誤用文を板書すると、全員誤用に気づくのだが、それが自分の誤用文であることに気づいていないこともあった。誤用を自覚してもらう目的で、受講者それぞれの誤用文を板書しノートにメモを取ってもらった。「毎回作文を書くときは、このメモを見て書くように」とアドバイスしたが、翌週には「メモを失くした」「どこにメモをしたか分からない」などメモを取ることにあまり効果は見られなかった。結局ハンドアウトを配布して、毎回このハンドアウトを持って来るように指示した。クラス内には、個々の能力の差もあり、また様々な性格の受講者がいるので、それに順次対応していった。



#### 4.4 授業を振り返って

最終試験は、「問題編」と「作文編」に分けて行った。「問題編」は授業中に練習をした「連用中止形」や「文体」の変換問題を中心に出题した。復習をしていれば、満点が取れる問題であった。試験結果は、前期クラスが90%~100%に対し、後期クラスは50%~90%の正解率だった。後期クラスは、同じ間違いが繰り返されたという点で復習不足は明らかであった。最終日に意識調査も兼ねて簡単なアンケートを実施した。アンケートの項目に「うちで復習をしたか」「添削された作文を見直し、間違いを確認したか」という項目を設けた。2項目とも「した」という解答が得られた。アンケート後にコースの振り返りを行った際、「文体の混同」がよく見られた点を指摘した。スピーチの原稿では「です・ます体」を使うので、混乱してしまったという振り返りが多かった。

間違いが続くことを毎回気にして対策を練っていたが、コース全体を振り返ってみると、最終目標である「論理的に説明文・意見文が書けるようになる」という目標は概ね達成できたと思う。特に説明文がよく書けていて、「教室を説明する」「ドラマの内容を説明する」では、描写が具体的かつ簡潔にまとめられていたので、どの受講者の説明文も分かりやすかった。後期のクラスは、日本語で意見を言い合うことを苦手としていたので、話し合う場を多く設けるより、クラスメイトがどんな作文を書いたのかが聞きたくなるような場を増やすなど、前期のカリキュラムから大きく発想を変えてもよかったかも知れない。例えば、「ドラマの台本を作る」「自分史」など受講者の興味があるテーマに変え、何か一つ心に残るものを作り上げてコースを修了してもよかったと思う。

#### 5. おわりに

2017年度前期と後期の2学期間「文章表現C」クラスを担当したが、前期のクラスは比較的順調に進んだ。受講者の反応も良かった。後期のクラスに関しては、4.3節でも述べたように3つの問題点があったため、最終日に簡単なアンケートを実施した。「書く能力が上がったか」という質問項目では、「上がった」「少し上がった」という回答が多く、「授業は役に立ったか」という質問項目では、全員が「役に立った」という回答だった。説明文と意見文の作成に関する復習を繰り返し行い、ポイントの再確認などの確認作業が続いたが、「役に立った」と感じていたようで、繰り返し行った復習も無駄ではなかったと思う。

授業計画について反省点が多い。中級クラスだから難しい課題をこなさなければならないという先入観がまずあった。前期は順調に進んだが、後期に関しては、「書くことが楽しい」と思えるような授業計画をもう一度練り直す必要があったと思う。中級だから難しいことを行うのではなく、中級なら中級なりに楽しむことができ、「書くことが楽しい」と思える授業計画も立てる必要があった。例えば、4.4節でも述べたが、「ドラマの台本を作る」という授業計画を立てたとする。この授業では、クラスメイトがどんな作文(台本)を書いたのかを「聞く楽しみ」に加え、クラスメイトに自分が書いた作文(台本)を「聞いてもらいたい」という楽しみが加わり、それが「書く楽しみ」へと繋がったのではないかと思う。「論理的に説明文・意見文が書けるようになる」という学習目標に捉われ、「書くこと」だけにこだわってしまい、受講者の「書く楽しみ」を考へることを忘れていた。楽しいだけでは良くないが、書くことへの興味に繋がる授業も必要であった。

## 参考文献

- 友松悦子（2016）『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク
- アカデミック・ジャパニーズ研究会（2015）『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アルク
- アカデミック・ジャパニーズ研究会（2015）『大学・大学院 留学生の日本語④論文作成編』アルク
- 大森雅美・鴻野豊子（2013）『作文授業の作り方編』アルク
- 石黒圭・安部達雄・有田佳代子・烏日哲・金井勇人・志賀玲子・渋谷実希・志村ゆかり・武一美・筒井千絵・二宮理桂（2017）『実践・作文指導』くろしお出版